

SIDNEY SPENCER

MYSTICISM IN WORLD RELIGION

1963. PELICAN BOOKS, A594

松本皓一

本書は先年渡米した折に入手したものの一冊である。その点では、新刊書という意味での新しさはない。しかし最近一読したところ従来の研究方法の反省にたつて、世界の主要宗教の神秘主義的側面を、体系的に要領よくまとめてあり、近年、神秘主義への関心がとみに高まっているにもかかわらず、これに関する手頃な文献が少いおりから、或いは参考の一助になるかと思ひ、あえて紹介することにする。

「神と人間」と題する講演をもとにして、本文三四〇頁、巻末に参考文献の目録十頁がある。構成は内容上二つに分けられ、一章から八章までの各論と、最終章にそれらを比較集約した部分とから成る。

著者の狙いは、一冊の書物の中で神秘主義諸宗教のタイプを比較し、そこから神秘主義そのものの特色・傾向を明らかにすることである。しかし著者は、神秘主義体験が内面的事実にもとづくために誤解されやすいとし、神秘主義の比較集約化には甚だ慎重であつて、そのためには先ず、各時代の主要な宗教神秘主義につき、章を追った記述から始めて、

第一章は、未開宗教の神秘主義であり、第二章はヒンドゥ・ミスティシズムであつて、ウパニシヤッド、バガバット・ギーダー、バクティ信仰などがとりあげられ、第三章の仏教では、大・小乗のほか、タントラ仏教が特にとりあげられている。第四章は道教・儒教、第五章は古代ギリシアの宗教、ならびにギリシア風文化の神秘主義であり、ヒロ、グノーシス派、ディオニソス密儀、ミトラ信仰、プロティノスや新プラトン派など、第六章ではヘブライやユダヤ教などの旧約世界の神秘主義、第七章ではキリスト教の新約聖書、東方教会、カトリック教会をとりあげ、比較的

に神秘的傾向の少いとされるプロテスタントでも、ベーメやジョージ・フォックスその他があげられている。第八章はイスラムであり、主にスーフィ派が対象とされている。

以上については八割以上の紙面をさいた著者は、それら各論的考察の比較集約の上に第九章で一般的なまとめをこころみる。ここで著者は、神秘主義表現形式の種々な相違にもかかわらず、神秘体験とその表現形式との間には本質的な関係があるとみて、その基本的傾向を明らかにしようとする。先ずその枠組みとして、^{セルフ}実在、汎神論、自己、世界、道徳生活、正統信仰の項目を設け、これによつて世界宗教の神秘主義を集約する。本書には、とくに著者自身の神秘主義についての定

師でもある。

本書は一九五〇年の「神秘主義宗教における神と人間」の「神秘主義宗教における神と人間」と題する講演をもとにして、本文三四〇頁、巻末に参考文献の目録十頁がある。構成は内容上二つに分けられ、一章から八章までの各論と、最終章にそれらを比較集約した部分とから成る。

著者の狙いは、一冊の書物の中で神秘主義諸宗教のタイプを比較し、そこから神秘主義そのものの特色・傾向を明らかにすることである。しかし著者は、神秘主義体験が内面的事実にもとづくために誤解されやすいとし、神秘主義の比較集約化には甚だ慎重であつて、そのためには先ず、各時代の主要な宗教神秘主義につき、章を追った記述から始めて、

第一章は、未開宗教の神秘主義であり、第二章はヒンドゥ・ミスティシズムであつて、ウパニシヤッド、バガバット・ギーダー、バクティ信仰などがとりあげられ、第三章の仏教では、大・小乗のほか、タントラ仏教が特にとりあげられている。第四章は道教・儒教、第五章は古代ギリシアの宗教、ならびにギリシア風文化の神秘主義であり、ヒロ、グノーシス派、ディオニソス密儀、ミトラ信仰、プロティノスや新プラトン派など、第六章ではヘブライやユダヤ教などの旧約世界の神秘主義、第七章ではキリスト教の新約聖書、東方教会、カトリック教会をとりあげ、比較的

義はない。しかし、この章での集約が、むしろそれに相当するものと言えよう。

以下それらについて簡単にのべたい。

究極的実在は神秘体験によって直接に得られる。その表現用語は、神秘主義者の所屬する宗教的伝統によって異なるが、いずれにしてもそれらを、真理を同じく本質的に理解したもものとして集約するならば、その意味は一つであり、異なる宗教の神秘主義を「神秘主義」として同列に理解することができようと言ふ。

神秘主義にとっては、超越神と同じく内在神も重要である。有限なるものと永遠なるものとが内面的自己同一化をする、これが汎神論的現象であるが、アイデンティフィケーションは単なるアイデンティティではない。つまり汎神論的神秘主義者は、彼自身であることとの同一を止めるのでなく、同一化によって彼のパーソナリティが益々豊かに拡充されるのである。

神秘主義者によると、人間はその限界を超えて永遠なるものに融合一体化し、神化され或いはニルバーナに達するが、彼らの人間本性に関する考えは現実的であり、仏教が自我の観念を除去せねばならぬマーヤとするよう

に、無我であること (Self-naughting) は、すべての神秘主義宗教が強調するところだといふ。エゴイスティックな衝動や分裂した低い自己に対して、永遠なるものと同一化した高次の自己は、個人的であると共に、「無限な魂」「宇宙の心」「久遠の仏陀」として普遍的であることが、神秘主義指導者の間に共通して認められている。又しばしば神秘主義では、普遍的神性と融合一体化することが、同時に、すでにそれを体現した人、つまり師への献身的な関わり方となる。シク教徒のグル崇拜はその一例であり、そこから神の人間化である師は、信仰の対象として宗教集団の中心となる。こうした視点から著者は、スーフィ派、クエーカー教徒、禅宗団などに見られる神秘主義の集約的側面を考察している。

次に神秘主義の倫理生活に二つの面があるとする。一つはネガティブな面、つまり浄化であつて、神と我々とを分つところのもの、慢心や怒り、自己愛や我執などを我々の内から除去することであり、他の一つは、ポジティブな面であり、普遍的愛である。但しそれは、単に慈善や同情のみでなく、社会共同生活の仕事や同胞への献身にもあらわれると言ふ。

最後に神秘主義と宗教の伝統的正統性の関係をとらあげる。神秘主義者は、彼の属する教団の正統的信仰としばしば対立衝突しやすい。しかし、それは、神秘主義者にとっての究極的よりどころが、あくまでも彼自身の体験に存するからである。ここに神秘主義的宗教が、正統主義規範から逸脱しやすい原因があり、それがまた同時に、生々とした宗教的実在につながっているという逆説的な証拠でもあると言ふ。

さて序文にも記されてあるように、本書の執筆動機には、マークエトの「比較神秘主義入門」(J. de Marquette, An Introduction to Comparative Mysticism, New York, 1949.)を別として、一書の中に種々な神秘主義宗教を比較考察した試みが、英文において少なかつたことへの反省にあつたと思われる。その企図が成功したか否かは別として、本書は世界宗教の神秘主義を体系的に把握するのに甚だ便利な入門書だとは言えよう。